正式発表のきっかけになった

敦賀半島のキタヤマオウレン (福井県敦賀市)

キタヤマオウレンを発見したのは、井波一雄(1912〜2005)である。井波は、子供の頃から植物に興味を持ち、全国の野山を歩き、独学で植物学を修めた異才である。特に細密な植物画に定評がある。画家の目線ではない、違った躍動感があり、生命力さえ感じさせる秀作が多い。作品の掲載された図書は、「広島県植物図選(全五巻)」がある。

発見年は定かでないが、岐阜県関市板取の山中で採集された。採集された標本は、国立科学博物館の奥山春季(〜1998)に送られ、原色日本野外植物図譜に、バイカオウレンの変種として発表された。ところが、キタヤマオウレンはタイプ指定がなされていない等の原因で、裸名(国際命名規約に則っていなくて、正式名にならない名前)であったため、後に同じ国立科学博物館の門田裕一が正式にタイプを指定し、独立種として発表した。

その経緯は、偶然から始まったのである。2011年3月23日、福井県の敦賀半島にエチゼンカンアオイの調査に出かけていた。小さな沢沿いに、点々とバイカオウレンらしき白い花が目に入った。しかし、何か変な気がして、よく観察すると、葉はかなり多きめ。バイカオウレンならば5全裂なのに、これは3全裂。ミツバオウレンやミツバノバイカオウレン(コシジオウレン)のようだが、これらは高山系の植物である。標高が全く違い、限りなく零mに近い。ひょっとして、以前山野草の雑誌で掲載されていた、白山山系のキタヤマオウレンではないかと思い出し、標本を採集、国立科学博物館の門田裕一博士に送って鑑定を依頼したのである。

ところが、これはキタヤマオウレンに違いないが、裸名になっているので、正式に発表したいので、最初に発見された岐阜県板取に行ってほしい旨の連絡が入ったのである。すぐ現地、板取に向かうが、ここはかなりの山奥で、谷が深い。ピンポイントの情報がない限り、辿り着くのは不可能と判断し断念。

翌月、門田博士が地元の案内者を伴って、岐阜県揖斐川町で採集に成功した。これが正式発表されたタイプ標本となるのである。

ストロンが出るのはバイカオウレンと同じだが、キタヤマオウレンの葉は大形で、3全裂する。花も大きく、花茎は太く暗紫色。花弁の舷部は、楕円状になった柄杓子状。

作品は、敦賀で撮影された画像をもとに、ボタニカルフォトの作品に仕立てたものである。

もともと希少種で個体数が極端に少ない植物。温暖化や獣の食害が影響すれば、瞬く間に消える運命にあるのは確実である。

キタヤマオウレンの花弁

バイカオウレンの花弁

キタヤマオウレンの根生葉

バイカオウレンの根生葉